

# 米ソの初期人工衛星打ち上げ競争をめぐる中国の公式報道

## — 『人民日報』と『中央日報』の初日報道を中心に —

松村 史紀

### はじめに

1957年10月4日、ソ連が第一号人工衛星スプートニクを打ち上げた。このできごとは当時冷戦の好敵手であった米国にとりわけ強い衝撃を与え、やがて宇宙空間をめぐる超大国間の熾烈な競争に転じる。このことからスプートニク・ショックはおもに米国社会に生じた現象として記憶されることが多い<sup>1</sup>。

当然ながら衝撃を受けたのはひとり米国にとどまらない。これが宇宙時代の始まりを告げるできごとだという大仰な記事はどこまでも通俗的であっただけに世界各国の紙面をひとしくにぎわせた。

なかでも北京は共産世界の領袖にして長兄のモスクワが成し遂げた「偉業」を連日熱心な筆致で伝えた。これが西側世界への痛打になると喜んだばかりではない。かつての科学技術後発国が世界初の最先端事業を制するまでに登りつめたその過程に倣えば、みずからもまた躍進できると人民を鼓舞したからである<sup>2</sup>。一方、台北からすれば、これは敵方の得点にほかならず、不安は否応にも高まった。

では両者は米ソによる人工衛星の打ち上げ競争をどのように報道、宣伝したのだろうか。その総体については別稿にゆずり、本稿ではその基礎作業として初日の公式報道を詳細に紐解くことにしたい。

そもそも中国の人工衛星開発に関わる研究はその宇宙政策や核ミサイル開発の一環として扱われてきた。また衛星開発が1970年以降に本格化することから研究の重点はいきおいそれ以降におかれることが通例である。スプートニク打ち上げ当時、北京・台北は膨大な量の新聞記事でこのできごとを伝えたが、その全容に迫る研究はほとんどない<sup>3</sup>。台湾海峡をはさんで両者はどのような公式報道をしたのか。

本稿では中国共産党(中共)機関紙『人民日報』と中国国民党機関紙『中央日報』をそれぞれ取りあげ、米ソによる初期の人工衛星打ち上げ競争をどのように報じたのかを追う。とくに三つのできごと—

1957年10月4日のスプートニク一号打ち上げ、翌月4日の同二号打ち上げ、翌年1月31日の米国による初の人工衛星エクスプローラー打ち上げ—について、両紙が各々初日に報道した紙面に分け入ることとする。

### I スプートニク一号をめぐる初日報道

#### 1. 『人民日報』の紙面概観

北京が『人民日報』紙にスプートニク一号の打ち上げを初めて報道したのはその二日後の1957年10月6日であった。タス通信が発した公報に全面的に依拠しながら第一報を発している。ただ、意外にも衛星の関連記事で一面を飾ったのは1点のみ、社説にいたっては農村問題を主題にしている。さすがに五面には関連記事を4点配しているが、その後加熱する報道に比べると、その宣伝姿勢にはどこか陰りがある。事前準備の整わないまま、慌てて第一報を打ったという印象を残す紙面である(表1参照)。

たとえば、中国要人がモスクワに祝電を打ったのは初報道当日であるから、その書面が紙面で披露されたのは翌7日であった<sup>4</sup>。

表1 『人民日報』1957年10月6日付、関連記事

記事の見出し	面
ソ連が宇宙旅行の第一歩を踏み出す——第一号人工衛星の発射成功：衛星は900km高空圏にて地球の周りを運行中、昨日広州上空を通過	1
中国—ハンガリー間友情の若々しさを祝す、貴賓旅程の平安無事を祝す——ハンガリー政府代表団帰国	1
華北無線電信器材工場が生産操業開始：ドイツ民主共和国副首相エルスナー [厄斯納 :Oelsner] が操業式典に参加	1
重複機構の合併、大量幹部を下部へ異動：化学工業部整理改革における重要な一措置	1
社説：農村へ行こう！労働戦線に行こう！	1
人工衛星の連続信号—北京無線電信局による聴衆は良好	5
人工衛星が世界各大都市を通過する時間	5
日本の科学者が衛星を見た ソ連が米国を超えたと認識	5

人工衛星	5
------	---

注：一面記事はすべて列挙。それ以外は衛星関連記事のみ列挙。網掛けは衛星に直接関連する記事。邦訳はすべて引用者による。[ ] 内はすべて訳者捕捉。ただし、その人名の漢語表記は原文、アルファベット・キリル文字の表記は訳者が併記したもの。以下も断りが無い限り同様。

## 2. 『人民日報』の関連記事

### (1) 一面記事

さて、一面の第一報は最新情報をこう伝えた。「各科学研究所および設計局による大がかりな緊迫した業務を経て世界最初の人工衛星が完成した。1957年10月4日、ソ連は第一号人工衛星を成功裏に打ち上げた。初歩的な情報によれば、衛星を運搬したロケットによって衛星は必要とされる毎秒8000km前後の軌道速度に達した」。

当日の紙面は慌てて用意したと思いが、その後ろめたさを打ち消すためか、一面の記事いわく、「本紙は以前、ソ連が国際地球観測年 [IGY] の科学研究計画にしたがい第一号衛星を打ち上げる予定であることを報道していた」。事前に承知していた計画がようやく実ったのだというこの語調はみずから余裕のある姿勢を演出するというにとどまらない。長兄の偉業がしかるべくして達成されたことも暗示する。このたびの成果が唐突なものではなく、由緒ある国によって手がけられたのだと印象づけるため、その起源を遡っていわく、「すでに19世紀末、ロシアの卓越した科学者ツイオルコフスキー [齊奥尔科夫斯基: Константин Эдуардович Циолковский] はその著作のなかでロケットによる宇宙飛行実現の可能性について初めて科学的に論証していた」。

ナチス・ドイツのロケット研究などについては目を伏せたまま、あくまでもモスクワの功績のみを讃えるくらいだから、その事業がいかに重大な意義をもつのかについても誇張するのに迷わない。「第一号人工衛星の打ち上げ成功は、世界科学文化の宝庫にたいするきわめて重要な貢献である。このような高空で実施される科学実験は宇宙空間の特性を認識し、太陽系の惑星としての地球の性質を研究するうえで巨大な意義がある」。さらに先を急いでいわく、「ソ連には国際地球観測年 [1957年7月～1958年12月] の期間中、いくつか人工衛星を再度打ち上げる用意がある」。「これら人工衛星は星間旅行実現の道を開拓するであろう。社会主義の新社会に生き

る人びとが労働を解放して主体的に人類で最も大胆な理想を現実に変えるのをわれわれ世代が必ずや目の当たりにすることは明白である」<sup>5</sup>。

### (2) 五面の関連記事

限られた情報とはいえ、衛星の詳細を伝えたのは五面である。まずはその存在を確認すべく、北京現地の観測情報を伝える。前日5日現在の消息としていわく、「北京新華社の強力な受信局の受信機は本日北京時間19時15分、ソ連の打ち上げた世界第一号人工衛星が無線発信機を使って発した連続信号を受信した。当該信号はタス社公表の周波数(2万5000周)に基づけば受信できる」<sup>6</sup>。あわせてタス通信の情報に依って世界各地における衛星の通過地点・時間を細かく示した。そのうえで今後の観測に資するよう、こう伝えた。「天文学愛好者と無線愛好者が観察するのに便宜をはかるべく、人工衛星の正確な座標は特別な公報によりつねに発表する」。また多数の地点で観測がなされることを印象づけていわく、「数十の放送局、66の光学観測所、一群の無線愛好者がいずれも人工衛星を観察することになる」<sup>7</sup>。

つぎに国外の活況ぶりを伝えた。以後、外国紙の記事紹介で連日紙面をにぎわせる『人民日報』であるが、初日報道では時差も作用してか、日本の反応を取り上げるにとどめた。いや、たとえそれだけでも伝えようとする姿勢にその意地が隠されているというべきか。日本の科学者がソ連の功績を認めたとすれば、無視するに忍びない。いわく、

日本の科学者たちは本日、ソ連による人工衛星打ち上げの成功が科学分野における米国へのもうひとつの勝利であると認めた。日本の著名な科学者原田博士いわく、これまで米国はソ連が人工衛星打ち上げの分野で米国を追い越すことを心配してきた。いまソ連が米国を追い越したのである。

天文学者で東京天文台の責任者宮地政司博士いわく、ソ連の打ち上げた人工衛星の大きさからみて、ソ連が科学分野にて史書に記録されるべき功績を立てたといえる。

くわえて、日本の報道がスポーツニクに沸いたことを伝える。NHKが衛星の無線信号を受信したと発表

したほか、「日本各紙は今夜、ソ連による人工衛星打ち上げ成功のニュースを大々的に掲載したが、これらのニュースのおかげで日本首相とインド総理ネールとの会談ニュースの掲載紙面は縮小を余儀なくされた」<sup>8</sup>。

以上の記事が表層的な情報提供にあたると思えば、本懐はその意義を解説するところにある。切迫した時間のなかで中身を取捨選択しなければならない最新情報の伝達とは異なり、解説記事は前もって予定されている事項であれば、その大半を事前準備しておくことができる。五面に現れた解説記事はその内容からみて事前に用意されていたと思しい。

まずは「世界最初の人工衛星」打ち上げによって、「ソ連が世界最先端の科学技術を有する」ことが証明されるとして、一面記事同様、その起源を前世紀における「ソ連のロケット理論、宇宙飛行分野で偉大な科学者ツイオルコフスキー」の研究に求める。

「その後60年間、ソ米英独など数多くの諸国が人工衛星の研究を進め、多種にわたる人工衛星の構造・発射方法の立案および具体的な設計工作に取り組んできた」が、結果、この競争を制したのがソ連というわけである。しかも米国設計の衛星は「ソ連よりもずっと小型で軽量」だと揶揄するのを忘れない。「ソ連の人工衛星が直径58cm、重量83.6kg」であるのに比して「米国のものは直径約50.8cm、重量9.7kgになる見込み」、その発射時期も「来年春期」予定とくれば、モスクワの優勢を語るに十分である。

これで敵方を凌駕できれば、残るは衛星そのものがもつ科技的能力を宣伝するに尽きる。まずは「地球の大きさ・形状」「地球各地の密度の違い」「地球磁気の分布と変化」「高空気象の状況」「高空の大気密度」「電離層」「高空における各種宇宙線」を測定・研究し、「流星・宇宙塵に関するデータを収集」することで「アインシュタインの『一般相対性理論』」などに「さらなる実証を加える」ことができる。そうならば「未来の宇宙航行に必要な各種データを収集」することになるから、「人類が宇宙空間に踏み出すための道を開拓することもできる」。今後は「人間搭乗用の人工衛星、有人宇宙ステーションと続き、はては宇宙飛行船へとたどり着く。ソ連の科学者たちはすでに人工衛星を月の衛星に転じる可能性についても論証しており、月・金星・火星まで飛行する

方案も提起している」として壮大な未来を描く<sup>9</sup>。

### 3. 『中央日報』の紙面概観

さて、同じ成果でも友邦のそれなら朗報、敵方のそれなら悲報、台北にとってスプートニク1号の打上げは報じるに難のあるできごとにはほかならなかった。それは紙面に明らかである。

北京同様、『中央日報』紙もタス通信がこの件を伝えた直後の10月6日、初めてこれを報じた。一面では関連記事を3点配しているが、いずれもトップ記事ではなく、批判さえ含むような内容である。劈頭を飾るのは駐台米軍のミサイル部隊に関する記事、共産側の攻撃があればいつでも応戦可能だと強がった。敵方の勢いを削ぐことに苦心した紙面だが、不安は免れなかったようで、じつに14点におよぶ関連記事で2面を埋め尽くしている(表2参照)。

ちなみに翌日の紙面では衛星関連の記事が一面から消えたが、二面に9点、三面に2点配されている。

表2 『中央日報』1957年10月6日付、関連記事

記事の見出し	面
ドイツ司令官が記者発表 駐台米軍ミサイル部隊は作戦配置完了 共匪が挑発敢行すれば即刻これを攻撃 米軍はミサイル射程2倍を実証	1
日中協力推進委員会 第二回会議今朝開幕 総統府張秘書長が招待を受け挨拶 昨日の予備会議で議事日程など決定	1
兪揆が昨日、足立正らを供応 挨拶で日中協力の強化を強調 足立正は挨拶でその反共的立場を表明	1
ロシアが人工衛星を宣伝材料に利用 李熙謀がロシアの衛星打ち上げを分析	1
曹諤將軍談 ロシアの衛星打ち上げは成果少なし	1
ロ帝ラジオ局がひけらかす 第一号人工衛星を打ち上げ 900km 高空にて地球の周りを運行 望遠鏡でも肉眼でも見える 表現さまざま	1
イラン新大使南漢儀 昨日総統に謁見、国書を捧呈	1
国民大会代表全国連誼会 昨日波托を歓迎 波托氏は自由世界が鉄のカーテンに包囲された人民を救い出すよう呼びかけ	1
空軍明日「音速爆撃機」実演挙行	1
張群総統に謁見 訪日経過を報告	1
匪軍大砲、昨日金門東北海上に射撃	1
米ホワイトハウス報道官が昨日声明 ソビエト・ロシアの人工衛星打ち上げは科学的重視に足る いわくロシアによる今回の発射に意外性なし アイゼンハワーに当該ニュースの十分な告知あり	2

米海軍研究実験室が記録 ソビエト・ロシアの打ち上げた人工衛星、すでに米上空を3回通過 米国防総省は当該衛星の追跡を続ける旨発表	2
米科学者が衛星打ち上げを認める これは宇宙探測の第一歩	2
米観測者 ソビエト・ロシアの人工衛星を目の当たり 西から東へゆっくり移動、輝点強度は約5級	2
米国はロケット分野で努力して先頭に追いつかねばならない、ロシアが弾道ミサイル発射によって衛星を打ち上げたと言見なす	2
ロシアの打ち上げた人工衛星が太陽の影に入る自由世界は観察できず、南北両極でしか見えず	2
東西軍備競争のさなかロシアが人工衛星を打ち上げたのは驚異的な発展 米軍事関係者が昨日発言	2
米科学者が予測、人工衛星の軌道はフィラデルフィア通過後中西部を越えるとみる	2
ヘルマン〔赫爾曼：Hermann Julius Oberth〕教授の談話 米は衛星分野の経費不十分 だからロシアが米より早く発展したのだ	2
ロシアの人工衛星打ち上げ後、中立主義が増長しよう 米国外交官が昨日分析	2
英日が人工衛星を観測	2
ロシアによる人工衛星打ち上げ カスピ海以北で実施 米科学者が推計	2
ロシア人は熟睡中 ロシアが衛星打ち上げたことを知らず	2
週間特論 兵器戦略論による反共必勝の鍵	2

#### 4.『中央日報』の関連記事

##### (1) 一面記事

さて、初日報道の紙面には台北の両義的な反応が色濃く表われている。一方では、米国が科技および軍事の領域で依然として優位に立っており、巧妙な宣伝戦に長けたモスクワもその内実は脆いと説く。他方では、米国内にもソ連の先進性を認める声があることなどからワシントンの立ち後れを案じている。

一面からその両義性が垣間見える。トップ記事は駐台米軍ミサイル部隊に関するものである。「台湾駐在米軍最高指揮官台湾防衛司令官ドイル〔竇亦楽：Austin K. Doyle〕将軍」いわく、「台湾に駐屯している米軍ミサイル部隊はすでに作戦配置を完了し、随時『行動』できるようになっている」、「もし共産党の航空機が米国の軍艦あるいは航空機に挑発を加えるようなら、われわれはワシントンの命令を待たず即刻反撃できる」<sup>10</sup>。

敵方に強さをみせたところで相手の成果を品定めする。まずは基本情報、AP 通信経由でタス通信の声明を入手し、「世界初の衛星」打ち上げが成功したことを伝えた。その形状や重量、高度、速度、軌

道などはもとより、「3秒ごとに『ビ、ビ、ビ』という信号を発し」ていることも報じた。また衛星の「目的」が「宇宙に関するデータ収集」などにあること、「軍事的価値」は「目下なし」と報じた。

とはいえ、不安材料は挙げれば切りがない。モスクワの発表が確かなものなら、「ソビエト・ロシアが米国を凌駕して第一号衛星を打ち上げたことになる」し、米国の「衛星実験」はというと「来春の予定」である。またモスクワが大陸間弾道ミサイル〔ICBM〕を利用して衛星を宇宙空間に送り込んだのではないかと推測する」声がワシントンにある。しかも敵方の動きはまだ途に就いたばかりである。いわく、「本日の人工衛星打ち上げは宇宙船を月、火星、金星にまで放射するというソビエト・ロシアの発表した計画の第一段階にもあたる」<sup>11</sup>。

相手に壮大な計画があるならそれだけで圧倒されてしまうが、内実だけは慎重に見きわめねばならない。その任を負うのが専門家である。長らく測量学校校長をつとめ、「最近カナダで国際地球観測年大地測量委員会会議に出席し帰国した」曹謨がみずからの強みを活かして知見を披露する。「ソビエト・ロシアは見せびらかすのが得意でほら吹き好きの国家」、「いま人工衛星を打上げて米国に一步先んじたが、実際にはなにもたいしたことはない。「なぜなら目下、科学力は米国がソ連よりなお強いはずであるからだ」。米国はもっと早く衛星を打上げることはできたが、マグネシウム製筐体の素材改良を重ねるなどして「つねに完全無欠を望むために現在もなお打上げていない」だけである。「十数種類の記録・研究業務をこなす必要があることから米国は重量軽減の研究を進め、いっそう高い高度に打上げねばならないのである」<sup>12</sup>。

ここで肝要なのはクレムリンの宣伝工作に狼狽しないことである。衛星の打ち上げ報道は「おそらく理由なきデマではないだろうが、これはロシアにとって絶好の宣伝材料である。なぜならロシアは他の分野では米国に追いついているわけではなく、今回だけ米国に一步先んじたからである。根っから宣伝好きのロシア人は当然これを心理的な武器とみる」<sup>13</sup>。

##### (2) 二面記事① —西側世界の観測

一面ではソ連の得点を低く見積もろうと懸命にな

ったが、二面ではやや余裕をもって多数の情報を伝えている。

世界各地を驚かせたと思しい衛星であるが、打上げのそのとき首都モスクワが静寂に包まれていたとする報道はそのひとつである。AP通信のある記者によれば、「午前3時20分、ソビエト・ロシア首都は平常どおり平静であった。有名な赤の広場は静まりかえって物音一つしなかった、この驚異的なニュースが世界各国首都に伝えられているさなか、モスクワでは少数のソビエト・ロシア政府関係者、科学者、新聞関係者だけが政府系通信社タス社とモスクワラジオ放送の発表を知っており、ソビエト・ロシア人民は早朝になってようやくソビエト・ロシアのこの科学的成果を知ったという次第である」。しかも「今朝、共産党機関誌」は衛星打上げを報じたが、「写真はおろか、評論さえなかった」<sup>14</sup>。秘密主義のクレムリンがこの事業に自信を持っていなかったことを暗示するような内容である。

モスクワ発の情報に限りがあるなら、世界各地の自由な報道から情報を集めるのが定石、米英日はその代表格である。まずは米国オハイオ州、4日夜コロンバス市にて衛星の目撃情報があったと伝える。「同地観測所責任者」は望遠鏡で「安定した一筋の光」が通過するのを見たといい、「スミソニアン天体物理観測所」にこの件を報告した。この初の報告につづき、インディアナ州ハイランド市でふたつ目の目撃情報があったという<sup>15</sup>。つぎに英国、衛星の信号を受信したとする無線電信員によれば、「その信号は[5日]午前7時に最高点に達したあと徐々に弱まっていった」という。東京天文台[現国立天文台]からも観測情報があった。5日午後6時24分、新潟大学教育学部助教授是沢三郎が「東経33度の位置にて衛星が西南から北東比飛行するのを観測」、「星の光よりも6倍半ある光度」だったという。ただ、これに合わせて否定的な消息も含めている。「日本最大」の「三鷹気象台所長宮島博士」いわく、衛星の発信機が「国際承認された周波数」ではない「20および40メガサイクルを利用している」ため「日本のあらゆる気象台」が衛星を観測できない<sup>16</sup>。

実際に衛星観測に難があるという報告は米国にもあった。「スミソニアン観測所所長フィップル[恵波ル:Fred Lawrence Whipple]博士いわく、当該衛星は目下、ロシア人および南北両極地域の人間にし

か見ることができない」、「計算にもとづけば、時速1.8万マイルで地球の周りを疾駆する当該ロケットは現在地球と太陽にはさまれた陰に入り、観測者が観測できない状態にある」。「これまで人工衛星が見えたとする報道はやはり誤報であり、観測者が見たのはおそらく流星か高く飛翔する航空機であろう」。

このように冷静な観察にまぎれて悪意をもった解釈も伝えられた。米国マサチューセッツ州ケンブリッジのある匿名天文学者は「ロシア人がその衛星を太陽の影に打ち上げたのは自由世界の科学者による観察を拒むためである」と早々邪推した<sup>17</sup>。

### (3) 二面記事② —米国の両義的反応

スプートニク衛星にたいして台北がみせた両義的反応は米国のそれをおおむね反映していたと思しい。

まずは当局の反応である。ホワイトハウス報道官ハガティ[哈格泰: James Campbell Hagerty]は今次の衛星を「科学的にきわめて重視すべきものであり、国際地球観測年であらゆる国家が追求する科学的知識にはきわめて大きな貢献があるはずである」と評価しながらも、「今回の打上げに意外性はない。それは米国の衛星計画にいかなる影響を与えるものでもない」と強がった<sup>18</sup>。ある「外交当局者」はロシアが「大いなる宣伝上の勝利を得た」とみて、「同国が人類の知る最重要な科学分野——宇宙という境界——で米国に勝った」ことを世界に向けて大々的にうたえるだろうと案じた。実際に「同国は大陸間弾道ミサイルの獲得競争で米国を打ち負かしたと表明している」。この情勢下、「中立主義」をとる諸国のなかに「ソビエト・ロシアの勢力範囲」に与するものが出てくるのではないかと懸念された<sup>19</sup>。

ペンタゴンでは海軍研究実験室の無線追跡機によって衛星の通過地域を特定していたが、衛星の打上げそのものについては評価が分かれた。海軍作戦次長フェルト[貝尼特: Harry D. Felt]少将はこれを揶揄して、当該衛星が「ほぼだれもが打ち上げることのできる鉄の一片」だと侮った。だが、新任の国防長官マッケロイ[麦艾楽: Neil H. McElroy]は「ソビエト・ロシアが軽視できないことを改めて明白に証明するもの」だとしてあくまで慎重であった<sup>20</sup>。いっそう厳しい見通しもあった。「米国軍事関係者」いわく、「この歴史的できごとは人類が『ロケッ

ト船』に乗って宇宙空間に侵入し、軍事部隊が『旧式』艦艇・航空機を使用する代わりに『宇宙船員』の設備を使用する時代の先駆けである」。またこれはソビエト・ロシアの「大陸間弾道ミサイル」に「すぐれた発展があった」ことを示すものではあるが、その「競争において米国を超えたと断言はできない」<sup>21</sup>。

つぎに科学者であるが、紙面にはその肯定的な反応がとりあげられている。人物は特定されていないが、5日夜、「米国科学者」が衛星打ち上げには「科学上の大いなる興味がつまっている」と発言したという<sup>22</sup>。これまた話者は不明だが、AP通信のニューヨークからの消息としてつぎのように伝えた。「科学者の発表によれば、この先駆者たる衛星は宇宙探測に向かう劇的な第一歩である」。また米国の衛星計画にたずさわる科学者は「第一号人工衛星の打ち上げ分野に競争はないと以前から何度となく述べている」し、「かれらはいまソビエト・ロシアの成果について称讃の限りを尽している」<sup>23</sup>。

さらにこれと同じ情報源からつぎの評言を借りている。「ソビエト・ロシアは人工の小型衛星を頼りに宇宙進出競争で一勝利を収めた」。これにより同国は「巨大で普遍的な名声および世界中の科学者からの祝賀を得た」。「人類がその両手と頭脳を駆使して作り上げたものがいま世界を旋回している、まさに宇宙のコロンブスである。これこそすばらしい原動力である。人類を地球に縛り付けていた鎖を断ち切ったのだ!」。同衛星は「おそらくきわめて価値の高いものである」。「無線電信」によって「知り得たデータを返信できる」というのはその一端である<sup>24</sup>。

相手を称讃する専門家が一転、厳しい目を向けるのが自国政府にたいしてである。そのひとり「ロケット専門家ハリー・スタイン[ハリ・史坦因: G. Harry Stine]」いわく、「米国はロケット分野で迅速にロシア人に追いつかねばならない」、かれらは「必ずや大陸間弾道ミサイルを使って[衛星を]発射したはずである」。「ロシア人は第二次世界大戦後ドイツのV-2ロケットをとらえ、すぐに製造を始めた。われわれもまたV-2を捕獲すると同時にそれを発射したこともあるが、われわれはそれを製造できないでいる」<sup>25</sup>。もうひとり、かつてドイツのV-2ロケット開発に携わったヘルマン[赫爾曼: Hermann Julius Oberth] ミネソタ州立大学教授は「ソビエト・ロシア人が宇宙

衛星打ち上げ分野で明らかに進展が早い」と認めていわく、戦後「5年間、米国の科学者は十分な経費がえられなかったが、戦後ソビエト・ロシア人は宇宙研究分野ですでに優位を占める」。米ソの差が研究費の違いにあることを示唆した<sup>26</sup>。

#### (4) 二面記事③ — 新兵器をめぐる米ソ競争

正面から衛星を取り上げたわけではないが、大陸間弾道ミサイルの出現をふまえた軍事問題の解説が二面に掲載されている。本紙の立場を色濃く反映する内容と思いたため、その概要をみておく。

まず「近代的戦争」を「兵器の研究・開発をめぐる競争」ととらえ、「新兵器の研究開発が応用段階に達すれば必ず戦略に影響をおよぼす」とみなす。

ではどのような「新兵器」があるのか。「目下、研究開発」されているものとして「①核弾頭を搭載・投下できる大型爆撃機」「②飛行距離1500マイルに達する中距離核ミサイル」「③飛行距離5000マイルの長距離に達する(大陸間ともいう)核ミサイル」の三種をあげる。①は「すでに応用段階」、②は「研究が完了して開発し始める段階」、③は「なおも研究途上にある」ものと解説する。

このうち③の「応用をはたしたものが、必勝の鍵を握る」として米ソ競争の先行きを占う。まずはロシア、「最近、長距離ミサイルの実験に成功したと宣伝したが、その表現は多分に曖昧」だとして「専門家の推計」にたよる。それによれば、同国がその製造を始めるまでに「なお4、5年」はかかる。その後応用段階にいたるまでには「大量の備蓄」を要するから、実用に転じるのに「最低でも5年」あるいは「1965年」までかかるとみる。

つぎに米国、「長距離ミサイル」については「アトラス」(Atlas)と「タイタン」(Titan)の二種をもつ。前者は「今年6月実験に失敗」、「数日前にもその再実験があったが成功の報はない」。後者は「来年夏に実験」予定である。米国はこれらの研究以外に敵のミサイルを迎撃するための「ミサイル製造計画」もある。米国はこれを「すでに研究しており、開発段階に入っている」。

以上のことから「米ソ両国の長距離ミサイルは1961年以前いずれも研究段階にあって脅威は生じていないから、双方目下の戦略に影響は与えない」。目下、米国は「戦略上の絶対的優位をほこる」ため、

向こう「4年間をどのように利用するのか集中的に研究」することが肝要と結ぶ。

さらに中華民国の心得を説く。「鉄のカーテン王国にたいする自由世界の包囲態勢はすでにできあがっているから軍事的視野からのみえば、共産党を消滅させる勢力は条件さえ備わればすでに順調にことを運べる段階に達している」<sup>27</sup>。

衛星打ち上げを念頭におかず準備されたと思しい記事だが、期せずして、ソ連の大陸間弾道ミサイル保有にたいする懸念を和らげる解説になっている。

## II スプートニク二号をめぐる初日報道

### 1. 『人民日報』の紙面概観

北京がスプートニク二号を初めて報じたのはその翌日11月4日、同一号のときと比べて事前準備が整っていたという印象を与える紙面である。

じつは数日前、毛沢東が「十月革命40周年」式典に参加するためにモスクワを訪れていた<sup>28</sup>。ソ連にとってこの記念事業の一環ともいべき試みが二号衛星の打上げでもあったから、事前調整を含めて北京がこれを大々的に取り上げたことに不思議はない。

さて、初日報道の一面にならぶ記事6点のうち4点までが衛星に関連している。総論のほか祝電、社説をセットにしてソ連の成果を祝した(表3参照)。

表3 『人民日報』1957年11月4日付、関連記事

記事の見出し	面
十月革命祝日に贈られた輝かしい贈呈品 宇宙への進軍でまたも大勝利 ソ連が第二号人工衛星を打ち上げ 衛星重量508kg、犬を載せて1500km高度を飛行、機器一式完備、信号が地球にあまねく伝達	1
中国科学副院長、科連主席李四光 ソ連による第二号人工衛星打ち上げ成功に祝電	1
ソ連科学がはるかにリード 米英諸国などの科学者が第二号新星を称讃	1
ソ連の全面的援助により成果が実る 重点事業57件がすべてあるいは部分的に生産開始	1
上海、重慶ちょうちん掲げ歓楽の雰囲気がいっぱい 十月革命記念慶祝活動が山場迎える	1
社説 またひとつ「赤い月」が昇った	1
第二号人工衛星が宇宙に飛翔したとの消息伝わる 北京・上海各界がソ連の新たな成果に歓呼	2
1958年天文カレンダー出版	8

### 2. 『人民日報』の関連記事

#### (1) 一面記事① — 総論、祝電、西側の反響

冒頭の囲み記事は衛星に載せられたライカ犬の写真こそ人目を引くが、総論としての記事であるため内容はそれほど奇抜ではない。まず「国際地球観測年の大気圏高層科学研究および宇宙空間の物理過程および生活条件の研究計画にもとづき、11月3日、ソ連は第二号人工衛星を打ち上げた」と伝え、「ソ連科学者」が「衛星打上げにより宇宙空間および大気圏高層の研究を拡大しつつある」ことを確認する。

この二号打上げが十月革命40周年の記念事業のひとつであることを印象づけるため、「第二号人工衛星を製造した各科学研究所、設計機構、実験者、工場のひとつとは衛星打ち上げによって偉大なる十月社会主義革命40周年を慶祝する」と報じた。

さらに衛星の詳細を伝える。「3日午後北京時間9時から9時04分、北京新華社無線電信局受信機は3回目となるソ連第二号人工衛星発信の無線信号を受信した」。そのほか、米欧豪日など各地における受信状況を伝えたが、特筆すべきは「この衛星に実験動物、一匹の子犬が搭乗している」ことであった。これに補足していわく、「すこし前、ソ連は犬数匹を210kmの高空に送り込む実験をしていた」が、この実験が今次打上げの「基礎となった」<sup>29</sup>。

さて、一号衛星の初日報道とは異なり、一面に祝電が紹介された。中国科学院はソ連科学アカデミーに祝意を表していわく、「今回の人工衛星にはより多くの科学機器が搭載され、宇宙空間および高空大気圏の研究にいっそう多くの貴重な科学データをもたらすことは間違いない。その打ち上げ成功および正常なる運行情況はソ連の科学技術がすでに全世界の最前線を進んでいることを力強く証明している」。さらに「神経系統の高等な生物が搭乗」したことは「きわめて重大なできごと」であり、「宇宙空間突入という新時代にあつて人類を大きく前進させる」<sup>30</sup>。

盟友を讃えるのが表面なら敵方の不安をあおるのが裏面である。動揺する米国社会の様相は北京にとって重要な宣伝資源のひとつであった。だから「重量508.3kg、犬を搭乗させたこの人工衛星に米国科学界は動揺した」として種々の発言を拾う。「国際地球観測年米国委員会副主席アラン・シャプレイ[亜蘭・沙普萊: Alan H. Shapley]いわく、この人工衛星の重量には『当然訝しさが生じる』」。スミソニアン天体物理観測所所長フィップルは同衛星が「科学

的成果でもあり、その重要性は『第一号人工衛星打ち上げの6倍』にあたる」と述べたとして、文字通り重量の重みをその意義になぞらえた発言を引いた。さらに衛星計画の責任者ジョン・ハーゲン[約翰・哈根:John P. Hagen]いわく、米国は「1958年初頭の衛星打ち上げ計画を『前倒しできない』」。

米当局の苦境を案じるのは科学者だけではない。連邦議員の声は拾うに容易く、語調もはげしい。共和党政権の失策を責める主役は民主党議員であろう。「ニューメキシコ州の民主党上院議員・上院原子力委員会副委員長クリントン・P・アンダーソン[克林頓・普・安德遜:Clinton Presba Anderson]」は「米国が重量わずか数ポンドの衛星を打上げると提唱しているときにソ連がこれほど大きな衛星を打上げたのだから、ソ連の科学が確実に巨大な進展を果たしたことは明白である」と嘆く。つぎに「テキサス州民主党下院議員ジョージ・H・マホン[喬治・赫・馬洪:George H. Mahon]」もまたこの件にふれ「どうやらロシア人が弾道学および衛星打ち上げ分野で先導していることを証明するものだ」と認め、「この情勢の重大性を理解する」よう米国人に求めた。

さらに西側諸国の反響は米国にとどまらない。ここでも科学者の声を集めて報じた。たとえば、英国科学振興協会会長は今回の衛星を「この上ない見事な進展」と断じ、その「重量」を「きわめて意外」、「まったく尋常でない」と評し、犬が搭乗したことについても「かなり興味深い」と表現した。また英国惑星間協会副会長ガットランド[肯尼思・加特蘭徳:Kenneth William Gatland]も「まったく見事なものだ」と二号衛星を褒め、これは「ソ連がすでに明日にでも十分な積載量のロケットを月にまで発射させられるということを物語っている」、「ソ連の進歩はわれわれの想像をはるかに越えた」と賛辞を送った。カナダではトロント大学ダンラップ天文台[鄧拉普天文台:David Dunlap Observatory] 所長ハード[赫徳:John F. Heard] が二号衛星の「重量は『ほとんど信じがたいものだ』」と話したという<sup>31</sup>。

## (2) 一面記事② — 社説

一面にならぶ記事が用意周到であったことは、その社説が衛星問題に対応していることからもうかがい知れる。体制間競争でしのぎを削る冷戦下、モスクワの偉業をもって彼我を対照すれば、その優劣

は明瞭だとする社説である。まずは十月革命による体制転換が科技研究に有利な環境をもたらしたと説く。

十月革命以後の40年間、ソ連の科学技術はやはり未曾有のものであり、一日千里の速さで前進し、資本主義世界最強の科学技術を有する米国を肝要なる幾多の部門にて追い落としている。それは罪深き資本主義制度が社会の生産発展にもたらず束縛を十月革命が根本的に破壊したことで科学技術の発展にたいしておよぼす束縛をも根本的に破壊し、科学技術を社会主義生産のための急速な発展に奉仕させたからである。

毒々しい表現はなおもつづくが、自由競争よりも計画的活動に利があるとするのがその主旨である。

社会主義のソ連では科学者、各技術専門家が資本主義世界では考えられない真の自由と十分な物質的条件を享受している。かれらは一握りの億万長者の顔色をものはや何うこともなく、資本集団にはびこる騙しあい、暗闘、相互の秘密保持、情報の相互窃取といったいわゆる「自由競争」の醜い局面を根本的に脱し、全人民の利益のために勤労するのである。ソ連の科学研究工作は統一計画、各分野の協力にもとづいて進められている。これによって科学技術研究のあらゆる人的・物的資源が最大限に効用を発揮できるのである。

当時、北京の宣伝工作で重宝された論理を凝集した表現である。これに説得力を加えるため、あえて敵陣に分け入り、その内部批判の論調を借用する。その代表格はノーベル化学賞受賞者にして「著名な原子物理学者ユーリー[尤雷:Harold Clayton Urey]博士」の米当局批判である。いわく、「米国政府による科学者迫害によって幾多の一流科学者は人工衛星研究を放棄させられ、米国の科学が遅れをとるはめになった」、「マッカーズムが衛星工作に悪影響を及ぼさなかったとはとても信じられない」。思想統制による迫害なら東側世界内部のほうがいっそう熾烈であろうが、その点にはあくまで目を伏せて発言を引く。

もう一人の論客は「エンリコ・フェルミ研究所[菲



米核粒子研究所：Enrico Fermi Institute of Nuclear Studies] 所長アリソン[艾利遜：Samuel King Allison] 博士」である。「資本主義の『自由競争』が科学の発展を阻害する」とみるかれが同「制度下、科学技術の発展が制約を受けた事実を提示した」と伝えた。

社説はつづけて「速度」に着眼した発展論を説く。「科学技術の平和競争」においては、当初ソ連が米国に「かなり出遅れていた」が、昨今の状況からすれば、「競争において決定的な役割をはたしたのは出発点ではなく、速度にある」といえる。「社会主義制度が科学技術発展の最高速度を保証してきたから、出発点で後れをとったソ連もいまでは幾多の基幹部門で米国に先んじている」。だから「科学技術発展の速度というのは社会制度の生命力を示す重要な標識である」ということになる。これをふまえて「今後の競争において、われわれはこの優位がますます強まると断定してよい」とした。

さいごに科技研究における衛星の意義を解説した。今次の成功は「近代科学において決定的意義をもつロケット技術、自動制御などの重要部門にてソ連が飛躍的進歩をとげたこと」ばかりか、「ソ連の国力全体が成長したことをも示す」。たとえば、「最先端の冶金、機械、無線電信などの工業部門にて強大な発展がなければ」、衛星打ち上げのための「一連の技術問題を解決することはできなかった」とするなど、衛星の一事業は幅広い科技研究の強さを物語るものだと説いた<sup>32</sup>。

### (3) 二面記事 —市井の様相

一面に豊富な記事を配した『人民日報』もそれ以外の関連記事は1点のみである(表3参照)。長兄の偉業を正面から讃えるのが一面なら、二面の記事はもっぱら国内の様相を伝えることに費やされる。

11月3日に「首都の人民」が盟友の「成功に歓呼する」様子を伝えた。同日午後、中央人民放送局がこの消息を「4時間のあいだに5回立て続けに放送した」。また「人民日報社の入口にて午後5時ころに速報が張り出されると、たちまちわれ先に見ようという人びとでごった返した」。北京市内では同日各地で十月革命40周年慶祝大会が催されていたようだが、衛星の消息がそこに舞い込むことになった。たとえば、「医薬衛生業界」の慶祝大会

にて衛生部のソ連専門家班班長が衛星のニュースを発表したところ、「来場者100名以上の医薬衛生専門家がしばらく鳴りやまない拍手をただちに送った」。また同「夜、北京真空管工場の職員労働者および工場駐在ソ連専門家が十月革命40周年をともに慶祝していたところ、このニュースが伝わり、場内はただちに喜びに沸き、大広間はしばらく拍手に包まれた」。そのなかで「年長の労働者王福興が興奮して演壇にあがり、『われわれ中国人民はソ連人民のこの新たな成果に歓呼する!』と述べた」という。さらに「慶祝会を挙行していた北京師範大学全校教員・生徒・職員・労働者もまたこのニュースに拍手を送り、それが5分間の長きにわたった」。

人びとが歓声をあげたのは祝賀会だけではない。「北京天文館でプラネタリウムの上演をみていた観衆500人あまりが突然、ソ連第二号人工衛星が天空を運行したというニュースをアナウンサーが報告するのを拡声器から聞きつけてすぐに歓呼するほど興奮し、拍手を送った」という。大学キャンパスも朗報に沸いた。「中国人民大学、北京大学、清華大学の学生たちがラジオ放送でこのニュースを聞きつけ、すぐにキャンパスの壁に赤紙の大朗報を張り出した」という。

市井の様相を伝えるにあたって、海外から新華社、そして中央から地方に向けてどのようにニュースが伝達されたのかもめずらしく解説する。いわく、

新華社はソ連による第二号人工衛星打ち上げに関するタス社のニュースを受信したあと、編集部工作員はすぐにこの朗報を各科学研究機関、北京各新聞社に伝達するとともに、上海、南京、広州、蘭州、昆明等の地域に電話で通知した。中央人民放送および新華社受信局はすぐに第二号人工衛星の発する無線信号を受信し始めた。

つづいて壁新聞にまつわる情景を報じる。「新華社の従業員はこのニュースを赤紙の壁新聞に書き宣武門路面電車駅、首都映画館、中央映画館などに張り出した」。すると「これら壁新聞はあっという間に幾重にも重なるほどの観衆で埋め尽くされ」、みな「この朗報に接して喜色満面、多くの人びとが喜び勇んで躍り上がり、拍手喝采を送った」という。

上海も北京に劣らぬ盛り上がりをもてたと宣伝す

る。当該消息は「3日夕方上海に伝わり、ただちに各界の関係者に極大のセンセーションを巻き起こした」という。ここでもやはり舞台は慶祝大会、「科学者」が一号衛星に関する「天文学者李珩の報告を聞き終わった直後、その予想外の朗報に接した」。会場にて新華社発表の二号衛星打上げの「ニュースが読み上げられたとき、場内は熱的な拍手につつまれ、ニュースの一言一句が称賛を呼んだ。大会主席の上海科連主任委員任鴻雋は興奮気味にこう話した。人類が星間旅行するという理想が近く本当に実現できることをわれわれは確信する。科学技術におけるソ連の驚くべき成果はソ連に学ぶというわれわれの確信をいっそう鼓舞するものであった」。

労働者の反響も忘れず報じる。「工人文化宮にて十月革命記念日を慶祝していた数千人の労働者がこの朗報に接し、その熱気にいっそう拍車がかかった。歌唱晩餐会では『モスクワ—北京<sup>33)</sup>』がただちに歌われ、第二号人工衛星にたいする祝賀が表明された。また「写真展『ソ連科学の偉大な成果』を見学していた労働者一団は立てつづけに拍手を送っていわく「この人工衛星は重量を増し、飛行高度もいっそう高く、おまけに動物まで乗せている。ソ連科学の発展はまさに一日千里である」。どこまでもおあつらえ向きの発言であるが、それだけに当局が意図する宣伝の内容がここに色濃く反映されていると思しい。

児童教育の現場も宣伝工作にはうってつけである。「少年宮ではソ連専門家と交歓していた600人以上の児童が突然、巨大な『喜』という字を二人の子どもが掲げるのを見た」という。このとき「指導教員は子どもたちにこう宣言した。天上の星にまたひとり友達が増えました。ソ連が本日第二号人工衛星を打上げたのです。すると「子どもたちはさっそくソ連の専門家を祝福し、銅鑼と太鼓をならし、立ち上がって『ワー [烏拉: Ура]、偉大なるソ連万歳!』と高らかに叫んだ」。

さいごに上海の科学者が人工衛星の製造、打上げに向けて会議を招集することを決定したと伝えて記事を結ぶ<sup>34)</sup>。

### 3. 『中央日報』の紙面概観

北京同様、台北もまた11月4日、スポーツニク2号打上げを初めて報じている。ただ、脅威でありこ

すすれ歓迎できないこの事態を報道するにあたり、偶然ながらも救いになったのはジューコフ [朱可夫: Георгий Константинович Жуков] 失脚のニュースであろう。二号衛星の記事を一面からすべて排除して、そこにクレムリンの政争を大々的に取り上げることができたからである。

結果、二号衛星が初日報道の一面を飾ることはなく、二面でもこれを直接報じた記事は2点にとどまる。社説も二号衛星に対応した内容とはいいい難い。しかも、同紙面には米の弾道ミサイルに関する記事が当てられていた(表4参照)。

表4 『中央日報』1957年11月4日付、関連記事

記事の見出し	面
ロシア指導者の鬭争また開幕 ジューコフ肅正口共が中央委員および幹部会職位から罷免 罷免の罪状を党による軍隊統制妨害と宣言	1
ロシア三軍政治組織 魔物ジューコフ罷免に追隨 軍部報道すべて同種の表明	1
魔物ジューコフ錯誤認める 口共の批判正しいと語る コネフ論稿執筆し魔物ジューコフを非難	1
ドナルド [Harrt Donald Felt 米海軍作戦部次長]、スプラグー [Mansfield D. Sprague 米国防長官補佐官] 本日、明日来華訪問	1
イラク王位継承者および帰国華僑同胞 軍事演習を見学 国軍の優れた態度を絶讃 イラク王位継承者らいま南部を視察	1
総統昨日イラク王位継承者を歓待 中東情勢の意見交換 イラク王位継承者が国王を代表し葉外相に勳章贈呈	1
中南米訪問から帰還 沈昌煥が昨日台湾到着 四ヶ月かけて19ヶ国歴訪 各国ともわれわれに重厚な友誼示す	1
韓国 [駐華] 大使金弘一が昨日帰国し報告	1
米議員サウンド [Dlip Singh Saund、上院] 昨日来華訪問	1
社説 ロシア帝国による軍縮の新提案	2
ロシアが第二号衛星打上げ 科学計器と犬を搭載 重量500kg、高度1500km、地球一周に102分間	2
ロシアが第二号衛星打上げ 米英仏独各地で信号受信	2
米弾道ミサイル「トール [雷神: Thor]」 飛行新記録達成 他の弾道ミサイルよりも500マイル遠方へ	2
魔物フルシチョフが核兵器実験停止協定の調印を吹聴 西ドイツの記者に戦争は差し迫っていないと語る	2

注: 上記「サウンド」は記事本文ではカリフォルニア州上院議員インド系共和党員となっているが、実際は民主党员。

### 4. 『中央日報』の二面記事

(1) 二号衛星の第一報

北京が記事を周到に準備したのとは対照的に二号衛星について限られた情報を何とかかき集めたという印象を与える紙面である。一号衛星のときにみせた執拗な報道姿勢と比べてもその差は際だつ。

タス通信の伝える公式声明を二本、全文にわたり転載しているところからして、情報の少なさを物語っている。第一の声明いわく、二号衛星は「科学計器および無線発信機を取付けた数個の箱」のほか、「実験用の動物1匹(犬)」を入れた箱も搭載している。第二声明はこれがIGY計画の一環であることに加え、「衛星から受信したデータによれば、その科学計器および当該動物の生理的作用の統制がいずれも正常である」ことを伝えた。さらにいわく、二号衛星によって「現在人類が宇宙のなかで奥深く測定できない自然資源がいくらか理解できるようになる」。また今回衛星製造に関わった従業員は「十月革命40周年を慶祝する贈呈品としてこの衛星打上げを謹んで捧げた」<sup>35</sup>。

西側世界の盟友がこれをどのように受け止めたのかについては報じるだけの材料に事欠いたのか、衛星の受信情報を細かく伝えるにとどめている。「米国海軍調査研究所」いわく、二号衛星からの「強烈で鮮明な無線信号をヴァンガード計画の各観測所が受信した」が「確実な軌道を確定するには時期尚早の嫌いがある」。そのほか、カナダの無線専門家が一号衛星よりも強度10倍の信号を受信したことをはじめ英仏独の各放送局の受信状況を伝えた<sup>36</sup>。

## (2) 関連記事 —フルシチョフの平和攻勢

二号衛星に関する報道は乏しいものの、当日の紙面ににぎわせる関連記事のうちとくに目を引くのがソ連の軍縮外交にまつわるものである。

ひとつは二号衛星打上げ直前、11月2日時点の消息である。西側諸国の同意さえあれば、「いつでも核兵器実験停止に関する協定に調印」する用意があるとする党第一書記フルシチョフの発言を伝えた。翌日、かれが「原爆弾頭および水爆弾頭を搭載したロケットは世界のあらゆる地点にまで発射できる」と「警告」したことも合わせて報じた。これまで核戦略で優位を占めてきた米国の立場が陰りはじめ、ソ連がICBMの保有を前提に西側大国にたいする姿勢を強硬化させていることを示唆する報道であった<sup>37</sup>。

一見、平和的姿勢を強めるフルシチョフであるが、その実、衛星打上げによって動揺する西側世界の虚をつく攻勢であるから警戒せよというのが当日の紙面に載った社説の主旨である。

いわく、「今期国連総会は軍縮問題を主要議題とする」が、「ロ帝」はその「討論で主導的地位をねらっている」。「ロ帝は人工衛星1基を打ち上げたあと、全世界を震撼させた」が、これがちょうど今期総会開幕の時期にあたる。「これを時期的な偶然の一致と誤認してはならない」。「明らかにロ帝はこれに乗じて自由世界の一部諸国にいつそう強烈な戦争恐怖の心理をもたらし軍縮交渉におけるみずからの冷戦的資本を強めようとしている」。衛星打上げ直後、「ロ帝」が「宇宙兵器の軍備管理を両国で討論しよう」米国に呼びかけたことはその証左である。

そこで「自由世界側としてはロ帝が人工衛星1基を打ち上げたからといって決して戦争恐怖の心理を強めてはならないし、それによってロ帝による恫喝宣伝の効果を高めたり、一部諸国に軍縮交渉が成功するという新たな幻想を生んだりしてはならない」。「戦争の製造者に希望を託すことは断じてできない」とうったえた<sup>38</sup>。

敵方がICBMや衛星で攻勢をかけるなか、少しでも盟友が善戦するすがたは見せねばならない。そこで米フロリダ州パインキャッスル空軍基地にて「中距離弾道ミサイル『トール』が『陸軍ミサイル・ジュピターを含む』米国のその他いかなる弾道ミサイルよりも500マイル遠方の距離にまで飛行した」と報じて、中距離弾道ミサイル分野における米国の奮闘ぶりを伝えた<sup>39</sup>。

## III エクスプローラー打上げをめぐる初日報道

### 1. 『人民日報』の紙面概観

スプートニク1号から遅れること約4ヶ月、1958年1月31日、ソ連の衛星よりも小振りとはいえ、米国は衛星エクスプローラーの打上げに成功した。

2ヶ月ほどまえ、米国は衛星用ロケット・ヴァンガードの打上げにしくじっている。侮る相手が今度はばかりは偉業を達成したとあって、北京はそれを抑制的に伝えることに腐心していたと思しい。

『人民日報』がこれを初めて報じたのは2月2日、台北がスプートニク2号の記事を一面から排除したのに似て、北京はこの消息を一面ではとりあげなか

った。五面に関連記事を3点配すとともにスポーツニク関連の記事を1点当てている(表5参照)。

表5 『人民日報』1958年2月2日付、関連記事

記事の見出し	面
全国人民代表大会第五回会議が開幕	1
中華人民共和国主席令	1
代表資格審査会が大会に提案提出 右派が人民代表資格を失う 章乃器ら38人は会議出席を許されず	1
われら活動のスローガンは浪費反対、勤勉節約による建国!	1
全国人民代表大会常務委員会民族委員会、法案委員会、国防委員会内の右派黄紹竑ら10人の職務罷免に関する全国人民代表大会常務委員会の提案	1
全国人民代表大会常務委員会民族委員会、法案委員会、国防委員会内の右派黄紹竑ら10人の職務罷免に関する全国人民代表大会第五回会議の決議	1
米国の衛星に関して	5
米国が小さい人工衛星を発射 赤い月の前ではスッポン	5
ソ連の第二号衛星はすでに1277周運行	5
米国の著名な評論家が認める ソ連のロケット・ミサイルは米国を大きく凌駕	5

## 2. 『人民日報』の五面記事

### (1) 総論 — 立ち遅れた米衛星

では、北京は米国製エクスプローラーをどのように評したのか。打上げの時期も遅ければ、重量など技術面でもソ連に遠くおよばないとするのがその総評である。いわく、「ソ連の人工衛星二基が相ついで宇宙に打ち上げられてから2ヶ月、米国も今年2月1日に小さな人工衛星1基を宇宙空間に軌道に送り込んだ。米国はロケット技術分野で依然立ち遅れ気味であるため、米国の衛星重量および宇宙空間に入った高度はなおもソ連の衛星と比べるべくもない」。

台北がスポーツニク打上げの報に接したときにそうしたように北京もまた事態を予想の範疇にあると強がって憚らなかった。いわく「米国は高度に発達した工業国であり、ついに人工衛星を宇宙に送り込むことができたが、なにも予想外というわけではない」。思えば昨年10月7日、フルシチョフは米国の記者レストン〔頼斯頓: James Barrett Reston〕にこう告げていたではないか。「もし米国が今日ロケットを保有していないとすれば、将来君たちも保有するだろう、科学は常に発展するものだから」。「だが、米国

の第一号人工衛星を宇宙に打ち上げる『ジュピター-C』型ロケットは中距離ロケットでしかなく、ソ連の保有する強大な大陸間弾道ミサイルのようなものではない」。

この長兄の言葉を味わいながら、北京はさらに敵方を揶揄する。「米国はその衛星を『Explorer』と命名したが、その実、宇宙空間への『探検』ということでは、ソ連の打ち上げた第一号・第二号衛星が先んじてあり、米国の衛星はなんと言おうがそれに後れを取ったのである」。

さいごに米国の挽回は難しいと結ぶ。いわく、「米国支配集団はあらたに態勢の立て直し」をはかろうとしているが、「ここ数ヶ月、米国の科学者でさえ米国の科学技術が核心部門でまちがいなくソ連に後れを取っていると認めるほどの有様である。これは一基あるいは数基の衛星を打ち上げることで挽回できるものではない」。「米国の実力政策が破綻」するのは食い止めようがない<sup>40</sup>。

### (2) 米ソ実力の対比

敵方の功績を抑制して評価するためには盟友の実力がそれを凌駕していると示すことが肝要、北京は両者を執拗に比較対照してみせる。

まずは重量、「数々の失敗を経て米国の科学者が2月1日国際標準時3時48分、ソ連第一号人工衛星の重量6分の1に満たない、あるいはソ連第二号人工衛星の38分の1にあたる小さな人工衛星をジュピターC型ロケットで軌道に打上げた」。この一文だけをみても、相手を侮る表現が随所にのぞいている。

つぎに苦労を重ねて打ち上げたものが小振りの代物にすぎないと、これまた相手を執拗に貶める。

ソ連第一号衛星から遅れること約4ヶ月で打上げられたこの衛星は「エクスプローラー」と命名された。同基もまた「ヴァンガード」ロケットによる衛星打ち上げで数々の失敗をしたフロリダ州ケープ・カナベラルから発射された。衛星は最後段ロケットの外殻重量を含めて29.7ポンド(13.5kg)である。衛星は円柱形で直径6フィート(15cm)、長さ80フィート(203cm)である。体積があまりに小さいため肉眼で見るのは難しい。

さらにソ連の衛星が南極をふくめてあらゆる大陸から観察できるのにたいして、米国のそれは「到達する地域に限界があり、最南端はウルグアイのモンテビデオ付近、最北端はわが国の鄭州付近までしか到達できない」。「ワシントン、ニューヨークにさえ届かない」と相手の成果を存分に詰った<sup>41</sup>。

これが北京発の嘲笑だとすれば、つぎに米国本国内の声を拾ってその効果を倍増させる。内容を精査すれば、米国が衛星打ち上げに成功する直前の評論であるから印象操作という点で悪意に満ちているが、それだけに北京の意図がよく現れた記事である。

1月28日、ニューヨークのタス通信が発した消息をもとに米国誌『サタデー・イヴニング・ポスト』に掲載された著名な評論家アルソップ〔ス図尔特・艾尔索普：Stewart Johnson Oliver Alsop〕の論稿を取り上げた。「われわれの失った時間を補填するためのいかなる奇跡的な『突進』も求めようがない」と論じるかれはこう見なす。「ソ連による人工衛星2基の打上げ成功は戦略的射程をほこる弾道ロケット製造分野でソ連が米国を大幅に凌駕したことを意味する」。その理由は複数におよぶ。まず「中距離弾道ロケット製造分野」でソ連の点数は「数百対ゼロ」である。「米国の『ジュピター』型および『トール』型ロケットは『少なくとも1年以内（もしかするとさらに長期）に兵器になりえない。』」つぎに「大陸間弾道ミサイル製造分野でも米国はソ連に後れをとっている」。ソ連は多段式ロケットだが、「実験に成功したことのない米国の『アトラス』ロケットは『単段式大型ロケットにすぎない』」。米国が「戦闘用大陸間弾道ロケットを製造できる」までに「3年、もしかすると5年」かかるかもしれない。さいごにエンジン、「人工衛星打上げにおいて米国がソ連に惨敗したという情勢がこの〔エンジン製造分野〕における米国の後れをはっきり証明するに足る」<sup>42</sup>。

このような一連の記事に上乘せて「2月1日モスクワ時間6時ちょうどまでに第二号人工衛星〔スプートニク〕は地球を1277回回った」と報じて、米ソ両衛星の歴然たる差を示した<sup>43</sup>。

### 3. 『中央日報』の紙面概観

これまで敵方の偉業を横目でにらむほかなかった台北にあって、米衛星の打上げ成功はなによりの朗

報、この一報に安堵し、沸き立つさまは紙面にも明らかである。その初報道は北京同様2月2日、一面を関連記事13点で飾るという活況、二面にも11点の記事を配す。スプートニク報道が二面中心だったのとは好対照をなす。まさに全力で宣伝工作をしかけたというべき紙面に仕上がっている(表6参照)。

表6 『中央日報』1958年2月2日付、関連記事

記事の見出し	面
アイゼンハワー大統領が昨日正式発表、米衛星は打ち上げ成功、地球の周りを運行中、衛星はデータ収集後すぐに世界の科学界に提供	1
米陸軍『ジュピターC』ロケット 空を切り裂く轟音 打ち上げ任務完了 米衛星の軌道は完璧この上ない 天空での寿命2年から10年か 100分あまりで地球一周を完了	1
米が衛星打上げに成功 わが各界嬉しさと安堵を表す 張其昀が米科学者の輝かしい成果を称賛 さらになる進歩に向け目ざめ立ち上がれと国民に呼びかけ	1
艾森徳鋭が昨日総統に表敬	1
米陸軍はもう一つ衛星打上げを準備中 米科学者レヴィット [Israel Monroe Levitt] が昨日、米は今年少なくとも衛星5期打上げと予測	1
科学的理由によれば、米衛星はロシア上空通過せず	1
米第一号衛星 「エクスプローラー」と命名	1
米衛星は円錐形 重量30.8ポンド、長さ80インチ	1
米人工衛星 生物を搭乗させず	1
米ロ衛星比較	1
ジュピターCロケットの父 ブラウン [Wernher Magnus Maximilian Freiherr von Braun] は学生時代すでにロケットを研究	1
わが関係当局が台湾海岸航行問題を解説	1
わが科学者が認識 米による衛星打上げは正常なできごと	1
ピルチャー参事官 [James B. Pilcher] 喜べど驚かず	1
週間特論 日本の国防政策と戦略思想【趙学淵】	2
板門店の停戦会議席上 国連軍代表が北朝に直言 核兵器撤去を拒絶 これを協定によって保持すべき勢力均衡の回復と見なす	2
米科学者が記者を招待しいわく、衛星が消息を返送 状況はかなりよい すべて当初の予想どおり	2
米による衛星打上げ成功はかつての名声を回復対口交渉の立場は強まろう	2
米の衛星打上げ4時間後 ロシア報道が簡素な消息を伝える	2
米第一号人工衛星 6つの神秘を探索 安全な宇宙旅行時代の到来を加速	2
衛星打上げ成功 米国人が熱烈に慶祝 アイゼンハワーが米科学者に祝意を表す	2
衛星打上げ成功 米株価上昇	2
米欧極東各地 衛星信号を受信	2
米衛星の信号受信方法	2

米の人工衛星打上げ 特別燃料を使用 ロケットも特別改良	2
米人工衛星計画図	2
ロシア国際地球観測年委員会 米による衛星打上げ成功を祝賀	2

注：4番目の記事に登場する「艾森徳鋭」は米国ユダヤ委員会理事長[美国希伯来連盟主席]を指しているようだが、該当人物は不明である。

#### 4. 『中央日報』の一面記事

##### (1) 基本情報

衛星打上げの情景から関係者の証言、衛星そのものの形状や科技的特質にいたるまで各種各様の情報を盛り込む記事が一面を飾る。

まずは成功に喜ぶ米大統領の横顔をとおして最新の消息を伝える。2月1日午前1時、アイゼンハワー大統領は「ジョージア州オーガスタにある休暇本部にて米国が昨夜ミサイル実験センターから打ち上げた円筒形の米人工衛星がすでに宇宙の軌道に入ったと発表した」。かれはこの報を「心待ちにしていた」から報道官ハガティから報告を受けたさい、「本当に素晴らしい」と述べたという。

ただ、今次の打上げが「最高機密のもとケープ・カナベラルにて実施された」から情報は依然断片的だとしていくつか拾い伝えた。たとえば、打上げ「当時大気圏上層の風速が時速200マイルあまりに達していたと考えられる」。またカリフォルニア州のあるラジオ局は「米衛星の発信機が利用する波長の発する一種『途切れながら起伏のある』信号を受信した」。あるいは「ミサイルが上昇したとき、そばで見ていた記者たちはみな歓呼の声を上げ喝采するのを禁じ得なかった」。これら断片的な消息にまぎれて、「この四段式『ジュピターC』ロケット」の打上げが「数ヶ月におよぶ辛い遅延および挫折に終止符を打った」として中央紙みずからの実感も忍ばせる<sup>44</sup>。

つぎに中央社が1日、ケープ・カナベラルで仕入れた現地の情景を伝える。「昨晚、巨大な轟音が15秒間静寂を破り、米国の第一号人工衛星が上空へ昇っていった」。打上げ前、ロケットは「まるで白色の巨大な柱が水銀灯のなかに聳え立つようであった。その内部にある液体酸素燃料から変化した煙霧がいくたびも外に噴き出し、はたで見えるものにまで先端および頭頂部の最終段ロケットが見えた」。

あわせて沸き立つ関係者の声を拾う。陸軍でミサイル実験計画を主管するメダリス[梅德里斯：John

Bruce Medaris] 少将いわく、「米国の衛星1基とソビエト・ロシアのスプートニク第二号は天空を同時に遊歴している。このことは(米国の) 打ち上げ計画の関係者を大いに奮起させた」。また「陸軍の科学者はアラバマ州ハンツヴィル市——『ジュピターC』の製造地——にて衛星打上げ後、ただちに慶祝の準備をするとともに当該衛星が軌道をとったことをまずは確言した」。そこでは「大統領の正式な宣言を待って慶祝する一群の人びとがいた」。さらに打上げ現場にほど近いパトリック空軍基地の劇場に集結した「新聞記者の一群」が「アンプをとおしてワシントンで行われている記者会見を拝聴していた」ことも伝えた。

あわせて衛星が正常に飛行していることについても科学者の口を介して報じた。メダリスいわく、「ジュピターC」ロケット設計者のブラウンによれば「当該衛星が確実に軌道上を飛行しているとあらゆる観測所が報告している」し、「無線発信機もまたまったく正常に働いている」。ブラウンは打上げの1時間半後、衛星が「カリフォルニア州サンディエゴ市付近『ローズキャニオン断層』の地上受信局を通過したとき」、「確定的な軌道をとった」と悟ったらしい。

この記事でも米国の心情を綴っているように装いながら中央社の所見をそこに表現する。いわく、「科学および加工製品化の分野で傑出していると自認し続けた国家[米国] は以前から陰鬱にこのときが来るのを心待ちにしていた。全長76フィートのこのロケットがあらゆる希望のをせて飛び立ち天を衝くのを目の当たりにすることは人を奮起させる不思議なできごとである」<sup>45</sup>。

そのほか小さな記事がならび、米衛星が「2000マイルの最高高度に達し」、「地球一週113分」で周回していること<sup>46</sup>、米「国防総省はこれ[衛星]を『探検家』(EXPLORER)と呼ぶ」が、「米国科学アカデミーおよび国立科学財団」は「正式な科学」名称を「1958Alpha」と呼んでいることなどを伝える<sup>47</sup>。

さらに重量、形状、直径、積載物、打上げ日時、速度などの基本項目で米ソ両国の衛星を対照させるなどした<sup>48</sup>。これまで後塵を拝してきた米国の衛星をソ連のものと比較対照することを忌避してきた台北がここにきてそれを示すということ自体、その安堵した心情を物語っている。

## (2) 衛星に沸く台北

つぎに一面を彩るのは朗報を喜ぶ台北各界のようすである。その総体を伝えていわく、

米国による人工衛星打ち上げ成功のニュースが自由中国の政治・経済・軍事・学術の中心地である台北市に伝えられて以降、各界著名人がみな嬉しさ、安堵、興奮の心持をもって強い関心を示した。政府・関係団体の責任者がその展開をきめ細かく注視し、それを随時検討判断していたほか、一般の著名人もまた米国による人工衛星打ち上げ成功のニュースを話題の種にして人工衛星の新たな展開に関して仕入れた情報を探り合った。

メディアも活況を呈した。「各放送局、通信社、新聞社は夜になってからも電話が鳴りやまず、市民たちはつぎつぎに電話で人工衛星に関するさらなるニュースを探っている」状況だった。「各放送局のニュース放送の報道によれば、昨日の番組が最高の聴取率をたたき出した」という。

この喧騒にまぎれて当局の声も聞かれた。盟友の偉業に驚きはなく当然の結果だと強がりながらも、胸をなでおろしたというのが偽らざる心情か。外交部スポークスマン江易生いわく、「われわれは米国がこのようにできる能力を備えていることはつねに確信していた。だからわれわれは安堵しているし、驚きは微塵もない」。教育部長張其昀はかつて論稿「宇宙世紀の到来」にてこう告げていた。「米国が科学で驚異的成功をおさめるにあたって、とりわけ大陸間弾道ミサイルの「開発成功」プロセスにおいて最難関の障壁——宇宙に進入し、再度地球に帰還すること——を円満に解決していた。このことは科学における米国の指導的地位を証明するばかりか、米国による人工衛星打ち上げの成功がたんに時間の問題に過ぎなかったことを物語るものでもある」。その張がこのたびいわく、

米国の科学者が孜孜として得た輝かしい成功はもとより想定内のことである。米国の科学研究は確かに適材適所であり、学問を十分に実用化するものである。とりわけ科学界の著名人は工業分野および軍事当局と緊密に協力してさまざまな重大な研究計画にすばらしい成果をもたらす。その国

家にたいする忠誠はいかなる称賛をもってしても過言にはあたらない。われわれからこの上ない敬服の気持ちを送りたい。

科技研究にとって米国の国内体制が最善であり、最適であるという最大の賛辞である。

中央紙はこの成果に触発されて、みずからをも奮い立たせる一節を用意した。

中国〔人〕は歴史上、創造力に富んだ民族である。火薬を発明し、それが欧州に伝わってやがて西洋近代史の幕が開かれることになる。〔中略〕われら炎帝と黄帝の末裔であり、長らく人後に甘んじるものではない。〔中略〕未来の世紀は「知恵の世紀」といってよい。知恵が劣れば、たとえ千丈の高さをほこる尾根でも鉄壁とはいえず、万里大波であろうと難所とはいえない。われら全国同胞は本質を理解して目ざめ、立ち上がって進歩を追いかけねばならない。高度で深い学術研究が教え導き、奨励するところにわずかな怠惰も許されない<sup>49</sup>。

スプートニク打上げ後には敵方の政略や軍事問題に忙殺されてきた台北もここにきて科技研究そのものあり方を再考するにいたったとみえる。

## (3) 両義的反応

さて、記事が豊富にならぶ一面ではあるが、残るものはやはり以前同様、両義的な反応である。

まずは肯定的な評価や情報を伝える記事である。中国人科学者のひとりとして兵工研究院院長酈堃厚の言を引く。いわく、「米国陸軍によるミサイル研究はこれまでずっと優れた成果を収めてきた」。スプートニク1号は「推力20万ポンド」のロケットによって打上げられたが、「当時米国陸軍は推力30万ポンドのロケットによってミサイルを発射していた」。だから米国陸軍による今次の成功は「じつに正常きわまりないできごとである」。また教育部科学委員会主任委員李熙謀いわく、「米国による衛星打上げ成功は米国が事前に十分な準備をしていたことがわかる」。天文学者高平子は米国が「必ずや近い将来つづけて完璧な衛星を打ち上げることを確信する」と述べた<sup>50</sup>。

次号衛星の打上げにたいする期待はやはりふくらんだ。これについては「衛星打上げの2時間後」早々に証言したメダリスの発言を引く。いわく、米「陸軍は『近々さらに1基(衛星)を打ち上げるよう命令を下した。』」一方、米空軍も1月31日に「大型大陸間[弾道]ミサイル『アトラス』の「地上発射実験を行った」が、これは「明らかに[衛星]もう1基の打上げのための準備である」と報じた<sup>51</sup>。

さらに国防長官マッケロイの声明をもって米国内に生まれている軍産複合体の存在を肯定的に示す。いわく、「陸軍、科学者たちは今夜米国の人工衛星打上げを達成した」。「これは米国科学界および工業界が軍部支持のもと達成した偉大なる成果である。人工衛星が集めたデータはあらゆる諸国と共有し、世界の科学的知識を増進させよう」。

ただ、同じ記事のなかにやや雲行きの怪しい消息も見える。「『ジュピターC』ロケットの父ブラウンがドイツの大学時代にすでにロケット製造の研究を始めていた」ことを告げる内容で今次の成果がナチス時代の遺産にいくらか依っていることを暗示する。それに続けて、AP通信がパリから伝えた小話を挿入する。いわく、「フランス人は本日[1日]、つぎのような衛星の小話を始めた。フランス人はある国[独]の科学者がソビエト・ロシアと米国の衛星製造に責務を負っていると考えた」。そこで「スプートニク2号が米国の『エクスプローラー』にいう。『あなたに会えてうれしい。わたしたちドイツ語なら通じるよね。』」<sup>52</sup>

米国にとって不利な情報はさらにある。その衛星の飛行範囲がスプートニクよりも狭いというのはそのひとつであろう。いわく「米国の人工衛星がソビエト・ロシアの上空を通過することはまったくない。これは軽視できないソビエト・ロシアの見解である」。ただ、このような設定になったのは「科学的理由」によるものであって「政治的理由によるものではない」。「必要とするデータ収集にとって最適の路線」だというのが米国などの科学者の見方である。ちなみにスプートニクも「米国上空を通過する」が本国「上空は通過しない」。これも「科学的な理由によるものである」<sup>53</sup>。

また生物を衛星に搭乗させたという点でもソ連は米国に先んじていた。記事いわく、「エクスプローラー」に「何らかの形式の生物が乗せられているのか」

と尋ねる記者にたいして、ブラウン博士が答える。「その予定はない」。さらに「笑いながらこう付け加えた。『蠅螂[かまきり]ならありうる。』」<sup>54</sup>

## 5.『中央日報』の二面記事

### (1) 基本情報

すでに衛星に関する記事で一面を埋め尽くしているため、情報の大半はそこに出そろっている。二面では重複する類似の消息にまぎれて詳細が伝えられる。

まずは衛星が順調に作動していることを確認する。2月1日、米国の「科学者が記者会見にていわく、宇宙の状況に関して衛星が返送する消息はすべて期待通り」、「本日午後すべての状況がきわめて順調」、「各地点[地上10ヶ所]の追跡システムが受信する無線信号は期待通り」である。この追跡作業については「カリフォルニア工科大学ジェット推進研究所所長ピカリング[皮克林: William Hayward Pickering]博士」がその成功を報告した。ちなみに衛星への計器配備は同研究所が担当したという<sup>55</sup>。

衛星の信号受信についても詳細を伝える。「ニューヨーク州リバーヘッドにある米国ラジオ会社[美国無線電公司: Radio Corporation of America=RCA]通信センターいわく、金曜[1月31日]夜10時51分、重量30ポンドの衛星を搭載した陸軍ジュピターCロケットの信号を受信した」。また「この信号は安定し途切れない」。スプートニク2基の「断続的なビー、ビーという音声とは違い、10時56分に消えるまでずっと途切れなかった」。その他、「日本の某アマチュア無線受信者」、「香港聯合受信無線局」、フランスの「リモージュの全国受信センター」も受信したとの情報が伝えられた<sup>56</sup>。

いくらかの知恵と道具さえあれば、一般市民も衛星を観察したり、信号を受信したりできるとあってその方法の指南にも余念がない。ならばスプートニク打上げ直後からその講釈を与えればよいものの、そのときは敵方の偉業を広く知らせようとするだけの度量に欠けたのか、いまになってようやく教授するという次第である。いわく、「受信機を短波108あるいは108.03メガヘルツの周波数に調整」すれば、「安定した音声聞こえるはずである」。また「1日の夜明けあるいは夕暮れ、望遠鏡を使えば、地平線近く



に『エクスプローラー』が見られるかもしれない』<sup>57</sup>。

そのほか、衛星が「宇宙と地球に関する6つの神秘を探測している」として、宇宙船、流星、宇宙の温度、宇宙の密度、地球の形状、電離層それぞれについて詳細な解説を加えた<sup>58</sup>。これまたソ連が衛星を打ち上げた直後には用意せず、いまになって特別の記事を用意するという有様である。

## (2) 友敵の反応

遅きに失したものの米国がなんとか衛星を打ち上げたその雄姿を敵方の領袖はどのように見たのか。これは台北にとっても気がかりな点であろう。

まずはタス社の初動をとらえる。いわく、「タス社は米国の人工衛星が宇宙空間にまで昇ってから約4時間後、ニューヨークからの電報で米国による人工衛星打ち上げの簡単な消息を伝えた」。

すばやく相手の挙動をとらえようとする敵陣であるが、その領袖はどのような反応を見せたのか。ソ連外務省によれば、「共産党の頭目フルシチョフあるいはブルガーニン総理はしばし評論はしない」らしい。ただそれに代えて、昨年11月、フルシチョフが最高会議むけに発表した声明を想起する。いわく、「米国の地球衛星の分野で友好的競争に従事するのをソビエト・ロシアは歓迎する。ソビエト・ロシアの衛星2基は米国あるいはその他諸国の衛星が昇ってきて衛星国の仲間入りするのを待っている」<sup>59</sup>。

スプートニク打ち上げ直後、米国がみせた強がりにも似て相手の成功に焦燥することなく、それを歓迎するだけの度量と余裕があることをことさらに示そうとしたところか。その姿勢は「ソビエト・ロシア国際地球観測年委員会書記」の言にも見える。かれはUP通信社の記者にむけていわく、「米国の衛星打ち上げは朗報である。わたしはソビエト・ロシア委員会を代表して君たち科学者が努力によってなし得た成功を祝賀する」<sup>60</sup>。

一方、盟友の祝賀ムードについては一面にて伝えたところではあるが、慶事であるだけに一部趣向を変えながら重複して味わうことを厭わない。まずはジュピター・ロケットの製造地であるアラバマ州マディソン郡ハンツヴィル現地の活況を伝えていわく、「衛星打ち上げ成功の発表後、こちらの市民は誰もみな歓喜して小躍りし、大いなる慶祝、熱烈な状況は大みそかを色褪せたものにし、歓呼、舞踏、拡

声器の音がずっと今朝方までやまなかった」。市井がにぎやかなら市政も忙しい。「サーシー [奚爾蘇: Robert Benjamin "Speck" Searcy, Jr.] 市長は飛行機で空から宣伝ビラを撒くよう命令し、陸軍がミサイル発射に成功したことを発表した。かれはまたパトカー、消防車、救急車を出動させて拡声器を一斉に鳴らして街頭を疾駆した」。さらに同市にあるロケット製造工場「陸軍レッドストーン兵器廠 [紅石兵工廠: Redstone Arsenal]」、そこから「ほど遠くない広場には数千人が集結し、スローガンを振り回していた」。そこには「ソビエト・ロシアの衛星は死に絶えた」、「宇宙はわれらのもの」といった文言が踊っていたという。

つづけてジョージア州オーガスタからの消息を伝える。アイゼンハワー大統領は国立科学財団理事長ウォーターマン [華特曼: Alan T. Waterman] 博士に祝電を打ち、衛星「打ち上げに責務を負い成功した科学者たちを祝賀」とするとともに、同「計画の全参加者にその祝辞を伝達するよう」求めた。ホワイトハウス報道官ハガティによれば、大統領は衛星打ち上げの成功を「科学的成果、また非軍事部隊によるある種の軍事的活動とみなした」という。またかれは「ほぼ夜通しで電話を受けていたが、今朝早く起床した」としてその没頭するようすも逃さない。

さらに新聞報道にも目をうつす。「米国による衛星打ち上げは本日 [1日] ニューヨーク各紙の主要ニュースとなった」として、数例を取り上げる。

デイリーニューズ紙では2 1/2 インチの文字で見出しを付けていわく、「われわれは月 [衛星] を軌道入りさせた。」ニューヨーク・デイリー・ミラー紙は1 1/40 インチの文字で見出しを付けていわく、「米国は第一号衛星を打ち上げた!」ニューヨーク・ヘラルドトリビューン紙の見出しにいわく「陸軍が第一号衛星を搭載したジュピター・ロケットを打ち上げた。無線で追跡活動を開始。」<sup>61</sup>

## (3) 衛星をめぐる米ソ競争

一時の喧騒が表面を覆ってはいたとしても、衛星をめぐる問題は好敵手との絶えざる競争を主旨とする。その内実を見失わないよう、米ソ関係の厳しい局面もあわせて報じている。いわく、今次の成功によって米国は「去年10月以来ソビエト・ロシアに奪

われてきた名声を取り戻したが、米国の政府幹部は「同国がいつそう励まねばならぬことを認めた」。かれらは「ソビエト・ロシアが米国に数ヶ月先んじて人工衛星 2 基を打ち上げ、その成果によって優勢を得たことをかりに過小評価するなら、それは不明の至りであろう」と発言したという。

ただ、今回のことでワシントンの対ソ交渉力に弾みがついたとも見えず。いまダレス国務長官は「宇宙空間におけるミサイル探測活動を平和目的に制限」するための監視機構を国連に設けるよう提案している。「米国がこのたび第一号人工衛星打ち上げに成功したことはソビエト・ロシアとの頂上会談にのぞむ米国の地位を強めることになるだろう。」「もし米国が人工衛星をめぐる競争で完全に落伍していたのなら、国務省幹部が頂上会談を望むはずがない」。ある政府関係者は私的にこう漏らしたという。「米国は人工衛星を打ち上げられたのだから今年中に最上級会議はできよう。米国人は人工衛星の打ち上げに成功する昨夜以前のような重苦しい気分にはならない」<sup>62</sup>。

外交的攻勢を促すのが衛星の力だとすれば、その衛星を文字どおり推進させる力のひとつが燃料である。その燃料に特別な改良を加えて今回の成功にいたったとする記事も二面にならぶ。ブラウン博士によれば、「ジュピター C ロケット第一段に使った特別燃料は一種の Hidyne [ハイダイン] と呼ばれる化学物質である」。博士は「その成分がなにかを説明しなかったが、それが通常の燃料よりも比較的重い重量を運ぶことができるということだけは述べた」。中央社は UP 通信の表現を借りながら「米国陸軍」が「ある種神秘的な『かなりの高エネルギー』燃料」を使って衛星を打ち上げたと報じた<sup>63</sup>。

その他、二面は「米国の人工衛星打ち上げ成功後、こちらの [スイス] 証券取引所の米国株が大引けから上昇した」という情報も交えてその好影響を伝えようとした<sup>64</sup>。

## おわりに

多極世界とは異なり、冷戦という二極世界の舞台におどる演者はその相手と対峙することを本務とするから、それぞれの内実はともかくも、たがいの挙動は相似したものになる。

米ソ両超大国による人工衛星の打ち上げ競争がな

よりその好例であろうし、各々陣営内にひかえるその盟友もまた見せる反応がどこか似てしまう。本稿でみたように、自陣営の領袖が成しとげた偉業には賛辞を送り、国内外の反響にまで目を光らせるが、敵陣営の酋長がつかんだ成果となると批判と嘲笑はまずまぬがれない。

それでいえば、北京と台北の反応はどこまでも類似している。確かに人類未踏の業績には違いないがスプートニクの一事をもってソ連の全面的な先進性を誇張する北京も軽量にとどまったエクスプローラーの一事をもって米国の科技的实力を侮ろうとした。かたや台北は内心に焦燥を宿しながらも敵方の人工衛星一事で米国の科技的、軍事的優位が揺らぐはずはないとみずからを言い聞かせるように強弁する。だが、真の安堵は米国の初衛星が地球を周回し始めたとき初めて訪れることになる。これを当然の成果に過ぎないと強がりながらも熱烈な筆致で伝えるあたり、本心がどこにあるのか透けてみえる。

二極世界にあつてこのような相似は平凡きわまりないが、両者異なる点もある。本稿で詳細に検討したように北京が友敵に向けるまなごしはほぼ一義的であるが、台北の反応はどこか両義的である。スプートニク打ち上げに揺れた米国社会には強い不安と焦燥が生まれたが、その盟邦のすがたを見てとった台北もまたみずから同種の恐れを抱えこんだ。ときに侮り、ときに畏怖するという両義的な敵のすがたが紙面に投影された。

では、『中央日報』のほうが多彩に富んだ記事を掲載していたかといえ、そうとも言いきれない。台北の関心はあくまでも軍事や安全保障に向う。かたや『人民日報』は友敵の表現こそ単調きわまりないが、科学技術全般への関心を示す記事から詞的表現にいたるまでじつに彩り豊かである。自由な報道とは対極にありながらも、ひとを魅惑する宣伝道具として長じた結果と理解すべきか。その詳細な考察は別稿にゆずりたい。

[付記] 本稿は科学研究費補助金(研究課題番号 19H01456)の研究成果の一部である。

<sup>1</sup> 人工衛星を含めた巨大科学をめぐる米ソ対立の総体は Reynolds (2010) に示されている。また米国の衝撃を主軸に据えながらもその後の中東、台湾海峡、ベルリン

- における各危機を含めて論じた作品に Levine (2017) がある。
- <sup>2</sup> その典型は「先進的蘇聯科学事業是我們的榜樣」[作者: 王淦昌]『人民日報』1957年10月20日、第6版。
- <sup>3</sup> 宇宙政策については Johnson-Freese (1998)、Handberg and Zhen ([2007]2012)、Harvey (2013)、『当代中国』叢書編輯委員会 (1986)、李鳴生 ([1995]2005)、鞏 (2006)、劉・劉・謝 (2014)、1950年代以降の核ミサイル開発については Lewis and Xue (1988)、Lewis and Hua (1992) などが代表的研究である。このような開発史のほか、近年著名な科技研究者の伝記が熱心に刊行されている。代表的なシリーズとして王 ([2015]2019)、郭 ([2015]2019)、譚 ([2016]2021)、陳・葛 (2017)、葉 ([2015]2021)、馬 ([2016]2020)。
- <sup>4</sup> 「蘇聯発射人造地球衛星 我国人心振奮 宋慶齡、錢俊瑞、郭沫若、沈雁冰、梁希等致電祝賀」『人民日報』1957年10月7日、第1版。
- <sup>5</sup> 「蘇聯跨出了星際旅行的第一步、第一個人造衛星發射成功、衛星正在九百公里高空圍繞地球運行、昨天經過廣州上空」『人民日報』1957年10月6日、第1版。[]内は引用者、以下も断りが無い限り同様。人名は原文の漢語表記にくわえ、特定できる限り、アルファベットあるいはキリル文字の表記を併記する。
- <sup>6</sup> 「人造衛星的連續訊号 北京電台收聽得很好」『人民日報』1957年10月6日、第5版。()内は原文。以下も同様。
- <sup>7</sup> 「人工衛星經過世界各大城市時間」『人民日報』1957年10月6日、第5版。なお、「人工衛星がユーラシア大陸各都市上空に出現する時間(モスクワ時間)」を抜粋すると、10月5日、廣州17時41分、マガダン〔ソ連極東〕17時52分、カルカット19時16分、ウランバートル19時23分、カラチ20時54分、アルマトイ20時58分、バグダッド22時32分などとなっている。
- <sup>8</sup> 「日本科学家看到衛星 認識蘇聯已經超過美国」『人民日報』1957年10月6日、第5版。
- <sup>9</sup> 「人造地球衛星」『人民日報』1957年10月6日、第5版。
- <sup>10</sup> 「竇亦樂司令向记者表示 駐台美軍飛彈部隊業已完成作戰部署 共匪倘敢挑釁當立刻向其開火 美軍方証實飛彈射程增加一倍」『中央日報』1957年10月6日、第1版。
- <sup>11</sup> 「俄帝電台誇耀 已發射第一枚人造衛星 在九百公里高空環繞地球運行 遠望鏡與肉眼可見 說法不一」『中央日報』1957年10月6日、第1版。
- <sup>12</sup> 「曹謨將軍談 俄射衛星成就不大」『中央日報』1957年10月6日、第1版。
- <sup>13</sup> 「俄以人造衛星作宣傳資料 李熙謀分析俄發射衛星」『中央日報』1957年10月6日、第1版。
- <sup>14</sup> 「俄人在酣睡中 不知俄已發射衛星」『中央日報』1957年10月6日、第2版。
- <sup>15</sup> コロンバス市では「アマチュア無線家およびその他の人びとが当該衛星の発する無線信号を受信した」とも伝えた。「美観測人員 目睹蘇俄人造衛星 自西向東緩緩移動 光点強度約為五級」『中央日報』1957年10月6日、第2版。
- <sup>16</sup> なお、日本のアマチュア無線家西里広次によれば、「福岡、九州、その他いくつかの地方で1週間前すでにこのような〔ソ連による衛星打ち上げの〕噂があった」という。中央日報紙はこれに推測を加えていわく、「これらの噂はソビエト・ロシアの諜報部門がばらまいて、可能な限り多くのアマチュアの注意を引きつけるねらいがあったものと見られる」。「英日測得人造衛星」『中央日報』1957年10月6日、第2版。
- <sup>17</sup> 「俄射人造衛星入太陽陰影中 不讓自由世界觀察係在北極區才能看見」『中央日報』1957年10月6日、第2版。ただ、同記事には米国の科学者が慎重に計算した衛星の軌道、通過地域、時間なども詳細に掲載している。なお、当時衛星の打ち上げ地点は公表されていなかったが、米国海軍研究所のある科学者がその地点を「カスピ海以北」と推測したことも報じられた(「俄射人造衛星当在裏海北 美科学家估計」『中央日報』1957年10月6日、第2版)。実際の打ち上げ地点はバイコヌール宇宙基地(カザフスタン)であり、この推測は実情に近い。
- <sup>18</sup> 「美白宮新聞秘書昨声明 蘇俄發射人造衛星 在科学上足以重視 謂俄此項發射並非意外 艾森豪已被充分告知此項消息」『中央日報』1957年10月6日、第2版。
- <sup>19</sup> 数名の政府関係者は衛星打ち上げによってソ連のICBM保有がほぼ示されたと認めている。「俄放射人造衛星後使中立主義囂張 美国外交官員昨分析」『中央日報』1957年10月6日、第2版。
- <sup>20</sup> 「美海軍研究實驗室記錄 蘇俄施放人造衛星 已三次飛越過美国 美国防部称將繼續追跡該衛星」『中央日報』1957年10月6日、第2版。
- <sup>21</sup> 「在東西武装競賽中俄放射人造衛星為一項驚人發展 美軍事人員昨天說」『中央日報』1957年10月6日、第2版。
- <sup>22</sup> 「美海軍研究實驗室記錄」(前掲)
- <sup>23</sup> 「美科学家認放射衛星 係探測宇宙第一步」『中央日報』1957年10月6日、第2版。
- <sup>24</sup> 同上。
- <sup>25</sup> スタインは「最近人工衛星に関する書物を物した」が、もともとは「ニューメキシコ州のホワイトサンズ・ミサイル実験場にてロケットの実験・発展の分野で5年間努力を重ね、いまはデンバー市のマーティンミサイル工場で秘密の設計工作に従事している」人物である。「美在火箭方面 須迎頭赶上 史坦因認俄放衛星係由彈道飛彈發射」『中央日報』1957年10月6日、第2版。
- <sup>26</sup> 「赫爾曼教授談話 美在衛星方面未獲充分經費 故俄進展較美為速」『中央日報』1957年10月6日、第2版。
- <sup>27</sup> 「星期專論 從武器戰略論反共必勝的關鍵」[作者: 曾虛白]『中央日報』1957年10月6日、第2版。
- <sup>28</sup> 毛沢東は11月2日午前9時、専用機で北京を出発し、同日(モスクワ時間3時20分、北京時間20時20分)モスクワに到着した。「向蘇聯兄弟們熱烈祝賀偉大的十月革命四十周年 毛主席率領代表團達到莫斯科 蘇聯黨、政府和蘇聯最高蘇維埃的負責人等到機場歡迎」『人民日報』1957年11月3日、第1版。
- <sup>29</sup> 「給十月革命佳節的光輝獻禮 向宇宙進軍的又一重大勝利 蘇聯射出第二顆人造地球衛星 衛星體重五百零八公斤、載狗高飛一千五百公里、儀器配備齊全、訊号傳遍全球」『人民日報』1957年11月4日、第1版。
- <sup>30</sup> 「中国科学院副院長、科聯主席李四光 電賀蘇聯發射第二顆人造衛星成功」『人民日報』1957年11月4日、第1版。祝電は李四光[中国科学院副院長、中華全国自然科学專門学会連合会主席]からソ連科学アカデミー総裁ネスメヤーフ[涅斯米揚諾夫: Александр Николаевич Несмеянов]らに宛てたものである。
- <sup>31</sup> その他、オランダのライデン天文台所長オールト[烏尔特: Jan Hendrik Oort]の「巨大な一成果」だという評言も引く。「蘇聯科学遙遙領先 美英等国科学家贊揚第二顆新星」『人民日報』1957年11月4日、第1版。
- <sup>32</sup> 「社論 又一個『紅色月亮』昇起来了」『人民日報』

- 1957年11月4日、第1版。引用箇所は一部順不同。
- <sup>33</sup>「中ソ友好を讃えるため1949年につくられた楽曲を指していると思われる。同曲はムラデーリ [Вано Ильич Мурадели] が曲をヴェルシニン [Михаил Максимович Вершинин] が詩を手掛けた。
- <sup>34</sup>「第二顆人造衛星飛上太空的消息傳來 北京上海各界歡呼ソ連の新成就」『中央日報』1957年11月4日、第2版。
- <sup>35</sup>「俄發射第二顆衛星 載有科學儀器及狗 重五百公斤、高一千五百公里 繞地球一周約為一百零二分鐘」『中央日報』1957年11月4日、第2版。
- <sup>36</sup>「俄發射第二顆衛星 美英法德各地 均已收到訊号」『中央日報』1957年11月4日、第2版。
- <sup>37</sup>「赫魔揚言願簽協定 結束核子武器試驗 告西德記者謂戰爭未在前」『中央日報』1957年11月4日、第2版。
- <sup>38</sup>「社論 俄帝的裁軍新建議」『中央日報』1957年11月4日、第2版。
- <sup>39</sup>「美「雷神」彈道飛彈 創飛行新紀錄 較其他彈道飛彈均遠五百哩」『中央日報』1957年11月4日、第2版。
- <sup>40</sup>「關於美國的衛星」『人民日報』1958年2月2日、第5版。
- <sup>41</sup>「美國射出小人造衛星 比起紅月亮 小巫見大巫」『人民日報』1958年2月2日、第5版。
- <sup>42</sup>「美國著名評論家承認 蘇聯火箭導彈大大超過美國」『人民日報』1958年2月2日、第5版。
- <sup>43</sup>「蘇聯第二個衛星已運行一二七七圈」『人民日報』1958年2月2日、第5版。
- <sup>44</sup>「艾森豪總統昨正式宣佈 美衛星放射成功 正環繞地球運行 衛星收到資料迅即供應世界科學界」『中央日報』1958年2月2日、第1版。
- <sup>45</sup>「美陸軍「天帝第三」火箭 破空一聲巨吼 完成發射任務 美衛星所取之軌道極為完美 在天上壽命可能兩年到十年 一百餘分鐘完成環繞地球一週」『中央日報』1958年2月2日、第1版。
- <sup>46</sup>「美衛星呈圓錐形 重三〇・八磅 長度為八十吋」『中央日報』1958年2月2日、第1版。
- <sup>47</sup>「中央社は今次の吉報をよほど喜んだのか、衛星に独自のあだ名までつけた。『女神 [原文「天后」の表記で馬祖等の別名]』というのが適切なあだ名であろう。「それは実験ロケット『ジュピターC』により発射されたものである。『ユノー [原文「朱諾」の表記で最高の女神 Juno を指す]』(すなわち天后の名称)は『ジュピター』(天帝の名称)の妻であり、ローマ神話の大神である。「美第一枚衛星 定名『探検家』」『中央日報』1958年2月2日、第1版。
- <sup>48</sup>「美俄衛星比較」『中央日報』1958年2月2日、第1版。
- <sup>49</sup>「美發射衛星成功 我各界表欣慰 張其昀讚美科學家輝煌成就 呼吁國人覺醒急起直追」『中央日報』1958年2月2日、第1版。
- <sup>50</sup>「我科學家認識 美發射衛星 為正常現象」『中央日報』1958年2月2日、第1版。
- <sup>51</sup>「美陸軍正準備 發射別一衛星 美科學家李特持昨日預測 美本年至少發射五顆衛星」『中央日報』1958年2月2日、第1版。
- <sup>52</sup>「天帝第三火箭之父 布勞恩讀書時 即已研究火箭」『中央日報』1958年2月2日、第1版。
- <sup>53</sup>「エクスプローラー」が「北緯35度から南緯35度の一大地帯を通過する」、つまり「南方で通過する諸国はチリ、アルゼンチン、南アフリカおよびオーストラリア、北方で通過する諸国はアルジェリア、シリアおよび中国大陸」だということも伝えられた。「基於科學理由 美衛星不經俄上空」『中央日報』1958年2月2日、第1版。

- <sup>54</sup>「美人造衛星 未放置生物」『中央日報』1958年2月2日、第1版。
- <sup>55</sup>「美科學家招待記者稱 衛星發回消息 情形非常良好 一切恰為原來預期者」『中央日報』1958年2月2日、第2版。
- <sup>56</sup>「美歐遠東各地 聽到衛星信号」『中央日報』1958年2月2日、第2版。
- <sup>57</sup>「收聽美衛星信号法」『中央日報』1958年2月2日、第2版。
- <sup>58</sup>「美第一枚人造衛星 探測六項奧秘 加速太空安全旅行期的來臨」『中央日報』1958年2月2日、第2版。
- <sup>59</sup>「美放衛星四小時後 俄報發一簡短消息」『中央日報』1958年2月2日、第2版。
- <sup>60</sup>「俄物理學年委員會 賀美發射衛星成功」『中央日報』1958年2月2日、第2版。
- <sup>61</sup>「發射衛星成功 美人熱烈慶祝 艾森豪向美科學家致賀」『中央日報』1958年2月2日、第2版。
- <sup>62</sup>「美發射衛星成功 已挽回過去聲望 將加強與俄談判的地位」『中央日報』1958年2月2日、第2版。
- <sup>63</sup>「美發射人造衛星 曾用特別燃料 火箭亦經過特別改變」『中央日報』1958年2月2日、第2版。
- <sup>64</sup>「衛星發射成功 美股票上漲」『中央日報』1958年2月2日、第2版。

## 【英文】

- Handberg, Roger and Zhen Li, ([2007]2012) *Chinese Space Policy: A Study in Domestic and International Politics*, New York: Routledge.
- Harvey, Brian. (2013) *China in Space: The Great Leap Forward*, Chichester: Springer.
- Johnson-Freese, Joan. (1998) *The Chinese Space Program: A Mystery within a Maze*, Florida: Krieger Publishing Company.
- Levine, Alan J. (2017) *After Sputnik*, Routledge.
- Lewis, John Wilson and Hua Di, (1992) “China's Ballistic Missile Programs: Technologies, Strategies, Goals,” *International Security*, Vol. 17, No. 2, pp.5-40.
- Lewis, John Wilson and Xue Litai, (1988) *China Builds the Bomb*, Stanford University Press.
- Reynolds, David. (2010) “Science, Technology, and the Cold War” in Melvyn P. Leffler eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Vol. III, New York: Cambridge University Press, pp.378-399.
- 【中文】[日本語音読みで配列]
- 王建蒙 ([2015] 2019) 『共和国科学拓荒者傳記系列 孫家棟傳』北京: 中国青年出版社。
- 郭兆甄 ([2015] 2019) 『共和国科学拓荒者傳記系

- 列 王淦昌傳』北京：中国青年出版社。
- 鞏小華（2006）『中国航天決策内幕』北京：中国文史出版社。
- 譚邦治（〔2016〕 2021）『共和国科学拓荒者傳記系列 任新民傳』北京：中国青年出版社。  
『中央日報』（台北）
- 陳丹、葛能全（2017）『共和国科学拓荒者傳記系列 錢三強傳』北京：中国青年出版社。  
『人民日報』（北京）
- 『当代中国』叢書編輯委員会（1986）『当代中国的航天事業』北京：中国社会科学出版社。
- 馬京生（〔2016〕 2020）『共和国科学拓荒者傳記系列 陳芳允傳』北京：中国青年出版社。
- 葉永烈（〔2015〕 2021）『共和国科学拓荒者傳記系列 錢学森傳』北京：中国青年出版社。
- 李鳴生（〔1995〕 2005）『天路迢迢：中国火箭衛星發射紀實』北京：中共中央党校出版社。
- 劉戟鋒、劉艷琼、謝海燕（2014）『兩彈一星工程与大科学』濟南：山東教育出版社。

# China's Initial Press Reports on the Early Artificial Satellites Launched by Two Super-Powers: A Comparison between the People's Daily and the Central Daily News

MATSUMURA Fuminori

## Abstract

The Soviet Union successfully launched its first artificial satellite on October 4<sup>th</sup>, 1957. This Sputnik incident has been remembered mainly as a shock for the United States because it immediately prompted Washington to emulate Moscow in space developments. In fact, however, the shock was not only for the U.S. but also for many other powers including China.

The sputnik shock for China was initially reflected not by its space policy but by its earnest news reports. Both Chinese communists (Beijing) and nationalists (Taipei) were enthusiastic about press reports on the U.S.-Soviet rivalry in launching satellites as an effort to conduct propaganda strategies. Previous studies, however, focus more on Beijing's space developments that virtually started in the 1970s but less on China's propaganda or press reports in the late 1950s.

This article aims to examine the Sputnik impact on China's newspapers by comparing press reports of the People's Daily owned by the Chinese Communist Party and those of the Central Daily News published by the Chinese Nationalist Party. The initial reports of the three major events consisted of the Sputnik-1 launching on October 4<sup>th</sup>, 1957, the Sputnik-2 launching on November 3<sup>rd</sup> and the first U.S. satellite (i.e., "Explorer-1") launching on January 31<sup>st</sup>, 1958. From these reports, two conclusions can be drawn.

First, both parties exaggerated achievements attained by their Cold-War allies. Beijing tried to illustrate that the Sputnik launching proved high growth of a former developing state, the Soviet Union, in the scientific technological field as well as that the incident destabilized the consolidation of the Western bloc. By contrast, Taipei could not show that the U.S. restored its prestige as a leader of the free world until the latter successfully launched its first artificial satellite.

Second, Chinese communists and nationalists similarly downplayed great feats achieved by their Cold-War adversaries. Whilst Beijing flouted the U.S. "Explorer-1" that was even smaller than the size of the Sputnik-1, Taipei claimed that Moscow managed to launch its satellites at the great sacrifice of citizens' ordinary life. Moreover, the latter even expected serious anti-communist movements to take place soon behind the iron curtain.

(2022年10月31日受理)